Shining ほいく

第３６号　令和３年３月１日
編集・発行　保育サービス化研修担当

保育の質向上プロジェクト研修

今号の shining　ほいくでは、一つのテーマに沿って継続的に保育の研究をし、専門家の助言や指導をうけ、保育の資質の向上を図ることをねらいとして取り組んでいる継続研究研修の中間報告会の様子をお知らせ致します。
昨年度より１年間で３回の研修として実施した結果、継続的に保育の研究をするという視点から、２年間かけじっくりと研究する方法に変更しました。
今回の研究園は、かないくぼ保育園と向台保育園の２園です。

テーマ　☆かないくぼ保育園☆　『あらゆるところを使って保育ができる』

『はじまりは・・・』

新年度のスタートは「安心・安全そして楽しい保育園」ということを考え一日一日の保育を繋げていく状態でした。園内継続研究を受けるにあたり「保育を改めて振り返る良い機会になる」という思いと「この状況の中で」という困惑もありました。そこで、職員の意識の共有ということから取り組みを始めました。

春夏『伝え合う・語り合う』

職員の意識の共有をいかに図るかということでは、方法そして時間の捻出が課題となりました。掲示ボード、付箋を使い、互いのおもいを見える化またプリントにまとめて配布する等を行いました。話し合いも職員全員または小グループで回数を分ける、またクラスごとに等ＰＴメンバーを中心に進めていきました。不安や疑問もありましたが、互いのおもいを確かめ合う月日でもありました。そのなかで園として課題となるものもみえてきました。

秋冬『困惑から共有へ』

「子どものおもいを大切にしたい、応えてあげたい」ということが何度となく出されました。どうしたいのか、どうしたらいいのかというやりとりのなかで、それぞれのおもいや考え、保育観が話されました。職員同士の個々の個性や感性等を知る機会となりました。そのことにより保育を実践していく職員同士が相手を知り、互いを尊重しながら一体感をもって子どもに向き合うようになってきました。更に保護者とも保育を共有する取り組みもみられてきました。

初春『これから・・・』

振り返ると「子どもたちのためにより良い保育をしたい」というおもいを確かめ合い、そしてそのおもいをかないくぼ保育園という土壌の中に入れてきたように思います。迷走もしましたが野口先生の助言に力をいただき、土台固めができました。実践も始まっています。保育園のいろいろなところを使って、子どもたちの「やってみたい」が叶う保育を進めていく。そして実践から振り返りを継続していき、課題とするものを改善しながら保育を楽しんでいきたいと思います。

テーマ　☆向台保育園☆『子どもが安心して自分らしく輝く保育を目指す』

＜取り組みの経緯＞

向台保育園は、小規模アットホームな保育園です。日頃からクラスの枠を超えて、自然な関わり合いがあり、その中で、クラス別保育の時とは異なった、子どもたちが伸び伸びと自分らしく過ごす姿があります。

向台保育園の特徴を踏まえ、幼児クラスでは、クラス別保育に加えて、異年齢での活動も行うことで、子どもたちの育ちをよりよくしていけるのではないかと考えました。また乳児クラスでは小さな集団である強みを活かし、より家庭的でより丁寧な保育を目指しています。こうした背景から、研究テーマは「子どもが安心して自分らしく輝く保育を目指す」とし、サブテーマについて、幼児は「多様な人間関係と親密さが子どもに与える影響」、乳児は「一人ひとりに寄り添い自己肯定感を高めるために」としました。

＜現状と今後＞

研究テーマに向けて、幼児クラスではクラス別保育と共に※１「おうち保育」と名付けた異年齢交流の時間を週に１度設けて取り組んでいます。両方の保育を実践していく中で、子どもたちが自分らしく輝く姿を事例として書き出し、考察を重ねているところです。乳児クラスでは一人ひとりの課題や要求を明確に捉え、具体的なアプローチを考え実践、事例から考察を重ねているところです。

今後も継続しながら、子どもたちの姿や職員の意識の変化を捉えて、研究研修を進めていきたいと思います。

※1〈おうち保育とは〉
・3,4,5 歳の子ども達と保育士を固定メンバーで２つのグループにして、一つの家族“どんな自分であっても自分の居場所はここにある”“その子がその子のまま受け入れられる”“ケンカをしても、甘えてもいい、兄弟のように関わり合える関係性”を目指して「おうち保育」と名付けています。

野口先生より　～かないくぼ保育園の中間報告を通して～

「子どもの探究・保育の探究」というテーマのお話でした。共通の言葉を探しながら、子どもと自分たちの必要感から研究とは何かを探っていく。子ども主体という観点から見て、今までの“当たり前”を見直すことを問い直し、ＰＴを中心とした園内研究に取り組む姿勢を全員で共有し、園内研究は面白い・楽しいと継続していくことを大切にしたい。また、振り返りを次につなげるための見える化、共有のためのおもしろい見える化を大切にし、子どもの姿から十分に感じる気持ちや探求心を取り入れていくものである、ということでした。

増田先生より　～向台保育園の中間報告を通して～

『今、求められている「思考する保育」』というテーマのお話でした。向台保育園の実践の中で、１．異年齢によって、同年齢ではない刺激がある。２．上の年齢のやっていることに、興味を持つため、下の年齢の子どもの発達が促される可能性がある。３．その反面同年齢での交流が不十分になる場合には、小学校での困難さが生じる可能性がある。４．あくまでも、この成長を土台にしていくことが集団の成長につながる。実践には柔軟性が必要で、「オーダーメード保育」が求められるということでした。

報告会の様子です

参加者の皆さんからの感想（学んだこと、感じたこと）

かないくぼ保育園の研究テーマが決まるまでの過程や今後の方向性の話が聞け、実際に自分の園が研究することになった時の参考になった。今後の方向性として『やりたいことをやらせてあげられないのはなぜか？どうやったら「いいよ」といってあげられられるのか』ということで、自分の保育の中で感じている部分なので、これからどのように研究が進んでいくのか期待が持てた。向台保育園の研究テーマは、『子供が安心して自分らしく輝く保育を目指す』ということで実際に一人ひとりに対してアプローチをしてどのように変化していったのかわかり易くまとめられていてよかった。自分の園にも同じような子がいるので参考になった。

いろいろな人から褒められることで記憶に残り、自己肯定感にもつながっていくという事で、一人ひとりの子どもを園全体で見守り育てていくことの大切さを感じた。今の保護者に大切なことを伝えていくには、きちんと説明できないといけないというところでは、常に学んでいく姿勢が大事だと思った。

子どもたちの言語能力、コミュニケーション能力の向上が求められており、その基盤である幼児保育の質の向上が重要になってくる。“保育の質”と漠然と考えていたが、６つの視点（①プロセスの質②構想の質③実践運営の質④成果の質⑤指向性の質⑥教育の概念と実践）があり、今後の保育をしていく中で参考にしていきたい。

増田先生の講義の中での低学年の暴力行為が広がっているということに実感があった。言葉で伝える力不足があげられていたが、自分が保育する中での足りなさを感じた。自己肯定感の仕組みについて説明できる保育士ということにも必要性を感じた。

職場での研修の活用

保育園時代に身に着けてほしいこととして、鉛筆の持ち方やハサミなどの道具の使い方、８方向がわかるようにするなどがあり、保育の中に取り入れながら身に着けられるように援助していきたい。

クラスの子のことについて、担任同士で折に触れて話をしていき、いろいろな見方があるということをお互いに理解してより良い保育ができる様に進めていく。

クラスや園での方法を工夫し、言語化すること、それを説明していくことを行えるようにしていきたい。クラスだよりなど身近なところから、なぜそれを行うのかを発信していきたい。

会議の中などで、今の状況を見極める事、今までの当たり前にしばられず、考えることを踏まえて進めていくようにする。

子どもへのアプローチだけでなく、保護者に対するアプローチにもさらに力を入れていこうと思った。さらに保護者に納得してもらう為に、毎月掲示してある『〇月の保育』が保護者から見てわかり易いものになっているかを考え直す良い機会になった。

褒め方の違いにより、自己肯定感が育つ事や、オーダーメイドの保育の話を参考にし、実践に取り入れていきたい。

実践に向けた各園の報告等ありがとうございました。
次年度の継続研究発表会が楽しみです。

今後も保育実践につながるヒントをたくさん吸収し、
保育の質の向上に向けて突き進みましょう。